

地元団体との連携からみる 今後の能力開発の可能性について “千葉土建技術研修センターとの取り組み”

沖縄職業能力開発大学校 大根 律久

1. はじめに

今日のめまぐるしい技術の進歩、躍進を遂げている社会の背後にはかつてその土台として支えていた伝統的な技術が多く存在する。建築技術においても、住宅のプレハブ化やプレカット工法に見られる工場生産型住宅が主流を占める一方で大工技能をはじめ建築技術の根幹ともいえる技能習熟者の存在というものはその1つであろう。こうした熟練技能者の卓越した技能を若手技能従事者に伝授をし、そのサポートを行うためには豊富なカリキュラムと目の行き届いた指導、それに応じた能力開発を積極的に推し進めることは非常に重要なことである。そこで、千葉県内の中小零細の建設関係企業の技能の伝承を継承しつつ、最新の技術の提供や技能者スキルアップおよび資格取得等に寄与する千葉土建組合技術研修センターを取り上げ、能力開発促進と若手技能者の育成という共通認識を持つ千葉職業能力開発短期大学校（以下千葉短大という）とのかかわりについて活動経緯とそこからみえてくる今後への期待を検証していく。

2. 千葉土建技術研修センター設立の経緯

かつての徒弟制度による劣悪かつ過酷な職場環境と非合理的な仕組みの改善の呼び掛けと同時に、千葉土建の上部団体である全建総連により『伝統技能の伝承・発展と新しい技術への対応の強化』という呼び掛けにより技術センター方式による総合的系統

的な技術・技能活動の展開を投げかけられた。これを受け平成15年8月全般的な技術・技能対策を進めていくためには、各講習や研修が単独的にバラバラに行われるものではなく、基本的な技術から新工法、知識、あるいは経営改善（健康、安全への配慮も含む）に至るまで会員の要求、社会的要請、運動の必要性によって一元的に管理運営する共同企業内訓練施設として技術センターを設立する運びとなる。この段階では、教務運営委員や外部講師陣としての役割はほとんどなかった。

3. 雇用・能力開発機構とのかかわりについて

その後、技術センターの目指す方向について一部学術経験者や千葉短大を含む雇用・能力開発機構の支援することにより将来あるべき方向を示していく検討委員会が設置された。今後の技術センターでの主軸となるのは役員、事務職員のほか車の両輪となり得る技術講師陣とその組織の根幹となる教務運営委員が実務を担うこととなった。その後、雇用・能力開発機構職員が参加することになるのは、平成17年度外部委員という立場でということになる。

4. 千葉職業能力開発短期大学校との主な活動について

技術研修センターにおける教務運営委員会の外部委員として参加するようになった後、その当時建設業における問題点、今後改善しなければならない技術的な問題、資格取得に必要な仕組みや技能者のス

キルアップにつながる人材育成に対するシステム構築などを検討するために各月一回のペースで教務運営委員会が行われた。そこで、当校でできる支援、職業能力開発の支援プログラムのノウハウを伝授することによってさまざまな連携活動が行われてきた。その主な活動を紹介する。

(1) 共同研究

マクロ型生涯体系プログラムの作成、生涯体系づくりと技能伝承指導法の確立と題して平成19年度に取り組まれた。その研究の概要は次のとおりである。

- ① 全組合員の職種、年齢、階層等に仕分けし、個人のスキルアップをサポートするために必要人材育成プログラム、生涯体系を作成する。これらは組合員個人に対して、職種別、年齢別、階層別等独自の技能判定表を作成しスキルチェックを図るとともにその他の能力を身につけるために必要な講習内容さらにはそのカリキュラムを提示する。
- ② 自分のスキルを時系列的に容易に判定できるプログラムの作成も行う。
- ③ 技能講習等カリキュラム、指導技法を整備することで技術センターの講師陣の指導レベルの向上を図るとともに受講者全員の知識習得力の強化を図る。その第一段階として、指導力の差異を少なくするために共通指導案を作成することとなった。それと同時に、指導に必要なツールの使い方(パソコンソフトの活用法)を検討するというものの。
- ④ 技能伝承(伝統技術を後世に残すために)
プレゼンテーションソフトを活用し、技能、技術を映像化し、見える教材として残していくというもの。

以上の結果を踏まえて研究成果が公表されるまでのプロセスとしては以下のとおりである。

ステップ1

現状の問題点の抽出と整理(研修の柱となる技能、スキルアップ、資格等の区分とそれに応じたカリキュラム構成)

ステップ2

構成要素のまとめ(区別、および全体像の形成作業)

スキルアップツールの整備(年齢、階層別体系表、スキルチェックシートおよび評価表の作成)

カリキュラム表の作成、指導技法のまとめ

ステップ3

各分野別指導書、指導案を作成し、あわせて技能伝承のための映像を整理する。

ステップ4

分野別、スキル別構成表のデータベース化および整理。

最終仕上がりとしては生涯体系プログラムのデータベース化(各組合員への配信システム)そのほか指導案、および技能伝承のための教材開発をしていくというものであった。なお、現在も教務運営委員会を通じてそれらシステム構築の継続作業中である。

(2) 人材育成研究会

今まであまり手のつけられていなかった建築大工職に焦点を絞り、雇用・能力開発機構の生涯職業能力開発体系に準拠したものに整理をしていく作業を行っている。職務別職業能力体系から作業イベントとレベルの軸に仕分けしてどの段階でどのような作業ができるようになればよいのかを明確にし、さらに各作業における細目のカリキュラムを検討している。なお、同時作業として、先に述べた共同研究のマクロ型生涯体系プログラムに移行し、年齢層別、職務別に合わせて個人カルテを作成することでジョブカードや能力開発を推進するための講習会参加、資格の取得を奨励することができるような仕組みづくりを模索している。

(3) 在職者訓練

増改築相談員等特に高齢者福祉に起因するリフォーム事業の拡充から高齢者配慮住宅のリフォーム計画のセミナーが千葉短大にて平成15年より平成18年まで行われた。参加者はリフォーム事業に積極的に取り組まれている建設業の方から、女性ならではの視点から高齢者リフォームのあり方を考えたい

という主婦の会からの要望を受けてのことであった。タイミングとしても介護福祉における建設業者の見方の変化が見られた時期もあり、多数の受講者が参加した。また、平成20年度に静的加力による耐力壁の破壊の状況を知るということで教務運営委員会へ提案をし、全支部への声掛けをした。教材としては普段から関心のあった納まりから、日ごろから疑問を抱いていた耐力壁の試験体の崩壊過程を確認したいとの要望で実現した。その結果、44名の参加をみて、普段みられない体験を通して新技術への対応の足掛かりとなった。

(4) ポリテクビジョンへの参加

小中学生をターゲットにし、大工に限らず、建築に関するさまざまな職種におけるものづくりの大切さ、面白さを体験することで、将来の進路の道標となるようその架け橋として活用していただいている。千葉土建技術研修センター内部講師を中心として指導に当たり、過去には、鉋削り体験のほか軸組みパズル体験、丸太切り体験（図1）、タイルアート、ミニ畳作り体験を行っている。作業としては各作業15分程度の短時間できる簡単で用意をしているが、建築大工職はじめ建築関連職種に対する興味を十分に惹きだせる内容である。今後もポリテクビジョンの続く限り参加をいただく予定になっている。

(5) 専門課程科目への技術指導

千葉短大住居環境科の専門実習科目である建築施



図1 丸太切り体験の様子



図2 繰ぎ手実習の様子

工実習Ⅰにて木材を扱った実習を行っている。指導には千葉土建技術研修センターならびに技術対策部から技能伝承という目的と若手技能者育成の一環として協力いただいている。図2は継手の加工実習を行っている風景である。追掛け大栓継ぎと金輪継ぎが主な課題である。5日間の実習を通して正しい道具の使い方から先人の築き上げた技術的な知恵を踏襲し、さらに工夫を重ねることによって今後のものづくり技能者としての感覚を身につけている。

また、時期を変えて上棟実習を行っている。屋根の形状（切妻、寄棟）に変化をつけた木造平屋建てを狭小の敷地において実施している。実習の内容としては足場の組み立てから、柱、梁、桁などの構造

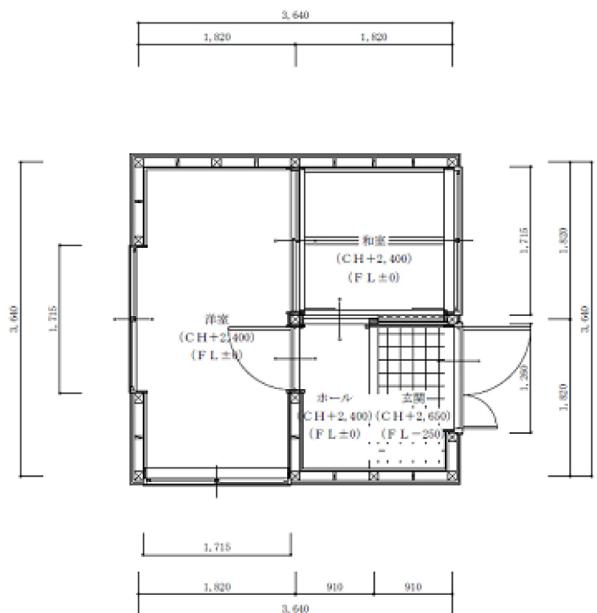


図3 上棟実習教材平面図



図4 上棟実習課題完成の様子

部材から筋かい、垂木などの羽柄材の組み立て、解体までより大工実務に近づけた形でその心得を含めて5日間の予定で実施している（図3、図4）。

実大の実習を行うことで、職方の苦労や作業上の段取り、注意すべき要点などがはっきりわかり、将来進むべき高度技能者や施工管理技術者の養成と技能伝承の一部として十分役だっている。

(6) 千葉短大との共催で実施している公開講座実施

毎年秋に千葉土建技術研修センターと公開講座を共同開催している。今年度も10月15日（金）に予定されているが、この講座もすでに3回を数え、各回80名程度の参加がみられている。テーマは社寺建築の構造や木にまつわる話題性のある話を土建会員のほか高校生から一般の方まで幅広く聞いていただいている。伝統的手法にとらわれない新しい技術の提



図5 公開講座の様子

供ということで業界に対する関心度を一層深める行事となっている（図5）。

5. 今後取り組むべき課題

今回は千葉土建技術研修センターとの連携を例にあげいくつかの能力開発業務を紹介したが、今後考えなくてはならない大事な要素は2つあると考えている。1つは、前述した実績のある行事が今後いかにして継続的に、かつ有効に行われていけるのかということである。これは関連団体との付き合い方を常に前向きで取り組み、時代の変化とともに教務運営委員会の中で研鑽を深め、その時流にうまく乗れるように努力を続けていくことであろう。さらには教務運営委員会に参加し、今注目されている話題の新技術や工法を提供し、お互いが意見を交わし次代に向けた提案ができる環境を整えることも重要であろう。2つ目は相手団体の要望にどの程度まで応えることができるのかということである。当機構の強みは建築分野に限らず工学的な要素ではさまざまな専門家の集団である。専門性の枠を超えてコラボレーションを図れば新しい可能性が生まれてくることであろう。いずれにしても当機構と各種団体との共生共栄が果たすことで新たな生涯教育の礎となれる期待している。

6. 謝辞

本報告書を作成するに当たり、多大なる示唆や情報をいただいた千葉土建一般労働組合技術研修センターの風戸直樹事務局長、伝統技法において技術対策部指導者として大変なご尽力をいただいた教務運営委員長 佐藤治夫氏、中島工務店 中島敏一氏、飯田工務店 飯田 誠氏ほか千葉土建一般労働組合の方々に対し、ここに記して謝意を表します。

なお、筆者は平成24年3月まで千葉職業能力開発短期大学校 住居環境科に所属していた。

<参考文献>

- 1) 千葉土建技術研修センター設立総会資料